
コンビニ！

水日子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンビニー！

【Nコード】

N3623Z

【作者名】

水日子

【あらすじ】

「あのさ、そりゃあさ、ここはコンビニだよ？ コンビニデスク？ んでもって俺が思うにコンビニ店員にこんな業務が課されたことは過去一度もないような気がしなくもないような気がするんだよね」「何言ってるんだ、コンビニ、つまりコンビニエンスストアとい便利屋の使いパシリが」「いやふざけんなや死ね」「おまえが死ね」そんな感じで送るコンビニハートフルコメディー……になればいいな！

いちのいち

矢部千之助。今をときめく二十七歳おとめ座彼女ナシ。趣味はプロレス鑑賞（特に女子）、夢は……まアとりあえず今月の家賃さえ払えればいいや。

「らっしやいませえー」

そんな僕ですが、職業、コンビニ店員八年目のピチピチ新人です。

「……いや、いやいやいや。八年目ってアンタ、どう考えても新人じゃないよ大ベテランだよついでにピチピチでもねーよ」

「うっせーな黙れよ水虫ハゲ」

「ハゲてねエエエ！」

「水虫は否定しないんだあ。へえ、ふううーん」

「ぐっ……」

エートこちらはフクテンこと副店長の内田サン。内田……エート、内気サン。

「んなわけねエだろオオオ！ 内田内気って俺生まれた瞬間から両親にどんな恨み買ってんの！？」

「チツ、うるせえな。じゃあ強気さんでいいかよ」

「何がいいの！？ ねえ何がいいの！？」

あーもう本当うるさい。これで副店長だつて言っただから世の中ってのは間違ってるってしみじみ思わざるを得ない。この先この人が店長にでもなってみろ、俺は首相にでもなつてるところだ。んでもって汚職で叩かれてるところだ。そうじゃなきゃおかしい。

「いや、おかしいのはそれを本人の前で口に出して言う君の神経のほうだよな？ どうしてくれんのコレ。どうしてくれんのおじさんのこの軽くないトラウマ。この心の傷どうし」

「オイ」

「あ？」

「へ？」

突如割り込んできた、ねじ込むような気配の声に、二人は同時に振り向く。視線の先には、どう見てもコンビニ（コンビニ）の人間ではないスーツの男。ちなみに千之助たちがたむろしてるのはレジの奥にある防犯カメラや商品受注をかねた管理室だ。つまり、スタッフオンリー、というやつで。

「……オイ、オイオイ何やってんスかお客サマー？ ここはあんたら愚民が立ち入っていい場所じゃねえんだよ、ごくごく限られた選ばれし人間のみしか入ることを許されないわば……」

「ちよつ、ちよつとオオオ、何言ってるのオ矢部くうつうつん！？」

「何って愚民に常識叩きこ」

「違うよね、違うよね、うっかり口がすべ……じゃなかった、声が裏返っちゃったただだよな！？」

「声が裏返ったって俺どんだけあがり症よ」

「そうだな」

直後、内田サンの顔がはつきりと硬直した。

「……オーイ、オイオイ何やってんスかお客サマー？ ここはあんたら愚民が立ち入っていい場所じゃねえんだよ、ごくごく限られた選ばれし人間のみしか入ることを許されないいわば……」
「ちよつ、ちよつとオオオ、何言ってるのオ矢部くつうつうん！？」

男がおもむろに背広のうちポケットから取り出した黒い物体。何だ？ 炭化した食パンの切れ端か？ と思ったのも一瞬、男の手の内にすっぽり収まるソレは、前触れなく喋りだしたのだ。千之助と内田、両方の声音をそっくりそのままに残した音で、聞き覚えのある ありすぎる台詞を、一語一句、間違いなく。

「管理室を開け放してべらべらくつちゃべって職務放棄も甚だしい挙句、買い物客にこのような罵詈雑言。しかるべき機関に提出すればしかるべき措置が取れる内容だな」

ふん、と面白くもなさそうに手中のボイスレコーダーのふざけた野郎を見下ろして、男は不遜に顎を上げた。矛先は、

「え？ え？ え？ エエエ！？」

目を白黒させた内田サン。駄目だこりゃ。

いちのに

「どうなんです、どうやらあなたはコイツより上の役職についているようだ。正社員なんだろう。アルバイトにどんな教育を施しているのかぜひとも伺いたいところだ」

「あ、う、えっと、その、」

「はつきりおっしゃってください」

「っあー駄目だ、これは駄目だ。この人メンタル弱いから。ちびこちゃんの山根君の胃腸並みには弱いから。昔いれたって肩の刺青だって、課長のツラを告白するぐらいには決死の覚悟だったって言ってたから。駄目だから。この人に言葉攻めとかホント、見てよ、ちよつと目尻に見慣れない水滴が溜まってるじゃん。」

「っかこのままだといらんこと言いそうだしな、主に俺の勤務態度とか勤務態度とか勤務態度とか。」

「しゃーねえ、面倒だけど適当にだまくらかすか。」

「とつさま」

重い腰をやつとこさ上げて、開いた千之助の口はそのまま口笛の形をかたどった。ピュウツと固まった空気にそれは場違いなほど軽快に響く。

「何？ あんたまさかのガキ持ち？ いやー人は見た目に寄らないねえ」

か細い声の音源は、管理室の敷居の前で立ち踏みする黒目がちな目の可愛い少女。いや、五、六歳に見えるから幼女のほうが正しいのか、と腐ったことを考える千之助を尻目に、先ほどまで悠々と内

田を追い詰めていた男の顔が見る間に渋いものになった。

「俺の子供じゃねえ」

ぞんざいな言葉遣いは男の素なのか、不機嫌そうな呟きに、さすが千之助は飛びつく。

「え？ あんたが孕ませたんじゃねーの？ つーことは何？ おたく人様の子供に父さま呼び強要してんの？ え、まさかの変態？ 変態来店？ スミマツセーん当店、変態変質者の来店はご遠慮願っておりまーす」

「んなわけあるかアアア！ 俺だって知らねえよこんなガキ！ いきなりついてきやがって、おかげで事務所にも行けねえよ！」

「あの一、あんま大声出さないでくんない？ 他のお客様のご迷惑になるんでえー」

突如吼えた男にダルそうにストップをかけるため、顔を覗き込んで、そこで千之助は気付いた。

男の目が爛々と危うげに輝いていることに。

ヤベ、と思ったときには既に胸倉を掴まれていた。

「……あいにく客は俺とこのガキしかいねえよ。よかつたじゃねえか閑古鳥が鳴いててよ。そりゃサボリがいもあるつてもんだ、なあ？」

「オーイ内田さん、これ撮って写メでいいから撮ってー」
「黙れ」

無気力に過ぎる救援は低い声でもって一刀両断される。男はほとんど同じ身長の子の千之助の襟首をことさら強く締め上げた。男同士と

いうことを差し引いても遠慮の欠片もない力加減。

「クビにされたくなかったら黙って面ア貸せ」

恐喝に近い、というか完全なる恐喝に、千之助の眉がピクリと跳ねた。自分の胸倉を鷲掴む男の手首に力を入れる。そうするとわずかに締め付けが緩んで、その隙に千之助は男の膝裏に足をかけた。

「うおっ!?!」

男の状態が傾くのを無感動に見遣って、未だに外れない男の右腕を擦り上げた。ぐ、と男の口から苦悶の声漏れる。

「なあ」

ダン、とコンビニの冷たく固い床に叩きつけられた身体の上に馬乗りになって、千之助は笑う。男は一度、ひどく険しい色をその端正なつくりの顔に浮かべたが、すぐに唇を引き結んで目を逸らした。

「ちよ、矢部くん!?! 別にそこまですることも……」

「なあ、お客さん」

千之助はいつそ優しいような声色で言う。

「コンビニってのはな、レジに並んで所定の料金払えばなんでも買えるんだよ。誰でもな。キャピキャピのJKでも、ピチピチの女子大生のネーチャンでも、ウツウツの育児疲れの三十代でも、ガタガタのバーサンでもな」

「いや、矢部くん、それ女の人限定じゃん」

「ほれ、こんな水虫だらけのオッサンでも副店長張れるコンビニだ。」

何をそんなに焦って買うよ？ 下痢止めか？ 悪いがソイツは薬局だからな、探してんなら地図でも書いてやるつか？」

「ちよつと矢部くん、いい加減おじさん怒っちゃうよブツツンしちゃうよ？ 水虫移しちゃうよ？ いいの？ ねえいいの？」

「……のくせに」

「あ？」

喧騒（主にフクテン）の中、男の唇がかすかに綻んだ。千之助は身をかがめて声に耳を澄ます。が、

「だいたいさあ、君の接客態度はいい加減目に余るといっつか、俺のやる気までそぐといっつか、いや別に俺にやる気があるのかと訊かれればなんていっつか、事務所を通してくださいとしかいえな」

「ちよお、黙って」

「ぐおっ!？」

内田さんの心の鬱屈の発露があんまりうるさくて、千之助はついに男の左手に収められていたボイスレコーダーを投げつけた。黒い放物線を描いた物体は、吸い込まれるようにして内田の口にはめ込まれた。

「フガモゴ、フガガゴ」

「よし」

不鮮明な唸り声をあげる己の上司に、千之助は満足そうな溜息を漏らすと、「さて」と男に向き直った。相変わらず視線は合わない。

「で？ なんだって？」

改めて問いかけると、男は再び唇を噛み締め、やがて双眸に挑発を載せて千之助を睨み上げた。

「べらべらうるっせーんだよ、てめえ。レジでおとなしくもできない野郎が、まあ口だけは達者だな」

クビになりたくなきゃ、とつとどけ。面倒くさそうに顎をしやくった男に千之助も負けず劣らず面倒くさそうに答える。

「さつきから聞いてたらクビクビってよオ、何それ脅してるつもり？」

「ああ」

「できると思ってるの？」

「できるぞ」

千之助はこのとき、初めて男の笑みを見た。

「本職舐めるなや、小僧」

もう一度言う。どけ。男はやはり面倒くさそうに軽く頭を振りながら千之助を押しやるうとする。

「アンタ、いつたい……」

「俺は、おまえらが散々相手してきたクレマーとは違うぜ。やるつつつたらやる。この職場が好きなら即刻どくんだな」

千之助は無表情に目を眇めた。空いた手で軽く拳をつくる。慌てたのはいわずもがなフクテンの内田だ。

「フガッ、フガガ、フガグゴ」

塞がらない口に四苦八苦しながらも仲裁に入ろうとする。当然だ。勤務時間内に暴力沙汰なんか起こされたら自分のクビも間違いなしだ。一応これでも衣食住が何とか保証されている明日は惜しい。

「つーかこれ、矢部くんの未来ある明日だっただけかかってんだからね！ と自らを奮い立たせながら諭すものの。」

「いや、俺フガフガ語とか習得してないから。履歴書になかったでしょ？」

「すげなく払われた。」

「フガツ、フガガガガ！ (いや俺だって習ったことねーよふざけんな！)」

「……やるつてののか？」

「おうよ。やるつつたらやるのがテメーの専売特許だと思うなよ」

「おもしろえ」

「フガツガ、ゲゴ、ゲエエエエ！ (ちょっと聞いている！？ う、

げげ、なんか入った！)」

「とりあえず一発な」

「後悔すんなよ」

「そいつは食らってから言えよ」

「ガフ、フガアアアアアアア！ (だから駄目だっただけで

しょオオオオオ！)」

千之助の腕が持ち上がった。千之助と男、どちらにも躊躇いがない。千之助が本気で殴って、男は本気で自分たちをクビにさせるだろう。

あ、終わったコレ。内田の頭は自然と公的扶助の申請手続きの流れに入る。自分でも分かっている、完璧なる現実逃避だ。内田は投げ

やりに後ろの防犯カメラのモニターを凝視することにした。

だから、気付かなかったのだ。男も千之助も内田も。誰一人として、気付かなかった。

扉の段差をまたぐ、小さな影を。

「はい、いち、にのさー」

「だめ」

「ん？」

服の裾が引つ張られる感触に、千之助は思わず目を斜め後ろに落とした。かち合った黒目がちの瞳。

「おま、」

千之助は絶句する。

「とうさま、きずつけたら、だめ」

「……オイ、」

男もようやく事態が飲み込めたようだ。目がこれ以上ないほど見開かれる。

「だめ、ゆいじ、ゆるさない」

「えっと、」

「とじちま」

「……ッ」

言葉に詰まった男に、少女は嬉しそくに破顔する。男の口が酸素を求める金魚のようにはく、と動いた。

そして少女は呼ぶ。とろけるように甘く、甘く。

「とつさま」

「フゴオオオオオ！」

呆然とした空気の中で、少女の疑いを知らない声と、内田の歓喜のむせび泣きだけが虚しく響いた。

いちのさん

「……で？ マジでアンタの子供じゃないわけ？」
「違う」

間髪入れずに忌々しく息を吐いた男に、千之助はがりがりと首を掻いた。

はく、と口を開いたきり、何も発さない男。とうさま、と呼ぶ少女 ゆいこと言っていたが はやはり幼げな笑みを無邪気に彼に向けたままだ。そんなでもって鬱陶しい内田のフガフガ語。

「アンタ、ちょっと来て」

とりあえず己の下に敷いた男を立ち上がらせる。そのまま襟首を、先刻の男と変わらない力強さで引き摺る。

「は、なっせ」

「とうさまー！」

「じゃあ内田サンはその子見といてねえ。くれぐれも逃がすんじゃないぞ」

「ゴ！？ フゴゴ！？ （え！？ 俺！？）」

「そんじゃ、オニーサンにはちよっくら話でも聞かせてもらいましよーか」

追い縋ろうとする少女のアフターケアは内田に任せ、千之助は男にっこり営業用スマイル。

「閑古鳥の鳴いてる暇なコンビニで助かっただろ？」

「じゃなきゃアタの話なんか聞いている時間も惜しいもんな。」

「……嫌味か」

「そう思っつていっつのは、心当たりでもあんの？」

「緩く問えば、男は片頬を吊り上げた。」

「ねえよ」

「……まったく。」

「悪びれなく嘯くさまに少し、苦笑した。」

「そうして、店の裏口まで引っ立てて、冒頭の会話とあいなるわけである。」

「実際問題さあ、ついてきたって、どんな風によ？」

「どんな、って……まんまだよ」

「十月のやや肌寒い風に二人して吹かれながら、質問を吹っかけてみる。出掛けに少々拝借した煙草の紫煙は強風に煽られてすぐに消える。」

「男は口元に同じものを啜えて、疲れたように前髪をかきあげた。露わになった額に、思ったよりコイツ若いんじゃないかねーの、と思う。」

「正直、思い出したくもねーが、そう、だな、三日前の朝のことだ、」

男が言うには、三日前の朝、いつもと同じように職場に向かう歩道橋の途中でいきなりトコトコ後ろを歩かれたのが始まりだという。とうさま、と呼ばれて、スーツの裾を掴まれたらしい。当初は誰かと勘違いしてるのかと思ってできる限り優しく（といってもこの男のことだからどこまで本当のことだか怪しいものだが）振りほどいた。が、それでも懲りないのでその日は撒いてきたのだという。二日目。すっかり昨日のことを忘れていた男を少女は待ち伏せて、そして今度は手を繋いだ。

「なんでそこでうつかり手を繋いじゃうかなー」
「うつせえよ、俺の過失じゃねえ」

話によるとまず最初に、とうさま、と満面の笑みで駆け寄って、自分がやんわりとその身体を押し遣ろうとすると目に涙を溜めて泣き出したらしい。朝の忙しい歩道橋の真ん中で。なるほど、さすがにそれはいたたまれない。

それでやむにやまれず手を繋いだが、これでもどう傍目から見ても父子の図である。おそらくそのお綺麗な顔を苦虫百匹ほど噛み潰した感じでいろんなどころを訪れたのだろう。交番を皮切りに、区役所市役所エトセトラ。もしかしたら近くの幼稚園や保育園も手当たり次第に当たったのかもしれない。

けれどその度と同じ手を使われ、冷たくあしらわれたのだろう。確かにこの歳の少女を持つには若い。おおよそ、どうしても仕事場についてきてしまうからあずかって欲しいがための詭弁だと思われるに違いない。俺だってその役人と同意見だ。あの顔を見るまでは。

少女から向けられた笑みに、声に、滑稽なほど呼吸の浅くなる男のあの様子。本来なら好戦的に光を放つのだろう双眸ににじませた恐れの色。

あれが演技だっというならいつそ役者に転身しろ。

「つーかもう職場までつれてくつー選択肢はなかったの？」

「馬鹿言え。殺されるわ」

「それはあの子が？ それともおまえ？」

「どっちもだよ」

どうやらお世辞にも素敵な環境ではないようだ。

「まあ、それで、一日終わっちまって、そしたらあんのガキ、『あ
そんでくれてありがとう。やっぱりとうさまはやさしいね』だよ」
「尾行しなかったの？ 家割り出せるじゃん」

「したよ。まあ早々気付かれて……これ以上は思い出さたくねーな
とりあえず捕まりそうになった」

「おおっ……」

「俺ア、絶対アイツの父親に一発ぶん殴ってやるって思ったね」

「それで、今日は父親探してたわけだ」

「まあ、な。敗色が濃いのに変わりはないが」

それで昼食がてらにコンビニ寄ったら店員がいやがらなくって以
下略だ。

気持ちよさそうにケムリを吐き出す男に千之助はうーん、と我な
がら運の悪さに同情を禁じえない。相手としてはおそらくその一端
を担う千之助にだけは同情されたくないだろうが。

「つーことでだ」

「あ？」

「俺はアイツの父親を探し出さなきゃ、出勤できん」

「そうだな」

「そしてこの広い街の数多の人間からただ一人を割り出すのは無謀

に近い。つーが無謀だ」

「そうだなあ」

「俺だけでは膨大な時間がかかるだろう」

「……そうだな」

「しかし」

待て、何だこの嫌な振りは。初対面の人間に対する前置きとしては史上最悪だ。

「二人だったら単純計算で一日が半日だ」

「ソウデスネ」

「労力も半分になる。違うか？」

「マツタク」

「と、いうことだ」

どういうことだよ。勝手に自己完結すんな訴えんぞ。

「今が昼の一時。アイツが帰るのは五時過ぎだ。それまでに父親を見つける」

「そうか、頑張れ」

「そうだよ、頑張れ」

煙草を壁にすり潰し、くるりと背を翻した千之助の肩に、がしりと負荷がかかる。

千之助は恐る恐る背後を窺って、そして次の瞬間後悔した。

好戦的な鋭い目。オイさっきの怯えはどうしたよ返せまだあつちのほづが可愛げあるわ。

「何をそんなに焦って買うよ、だっけか？」

「……嫌味デスカ」

「心当たりでも？」

「ないですねえまったく欠片たりとも！」

「そいつはよかった」

男の顔には一分の隙もない営業用スマイルが貼り付いていた。何
おまえ結構根に持つタイプなの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3623z/>

コンビニ！

2011年12月13日10時50分発行